

平成22年 6月 2日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19520137

研究課題名（和文） 飛鳥井雅親・雅康の伝記史料の集成と研究

研究課題名（英文） Collection and research of biography historical materials of Asukai Masachika and Masayasu

研究代表者

末柄 豊（SUEGARA YUTAKA）

東京大学・史料編纂所・准教授

研究者番号：70251478

研究成果の概要（和文）：室町時代の中後期に活躍した飛鳥井雅親・雅康という兄弟を中心に、和歌と蹴鞠を家業とした同家の活動について史料を収集するとともに、その史料に関する基礎的な研究をおこなった。とくに、室町時代の公家日記における飛鳥井家の者の所見 5000 件以上を索引形式でまとめて公表した。また、室町時代の和歌史の史料として注目すべきものでありながら、従来文学研究者によって注目されることの少なかった諸史料について、史料紹介を行った。

研究成果の概要（英文）：Asukai Family was an aristocrat who specialized in the Japanese poem and the ancient football. The brother of Asukai Masachika and Masayasu took an active part at the middle and late period of Muromachi Period. I collected the biography historical materials concerning this brother, and did a basic research on it. In addition, I collected 5000 data or more of the person of Aukai Family from many diaries of the court noble of Muromachi Period, and brought it together in the index form. Moreover, I introduced historical materials concerning the Japanese poem of Muromachi Period that a literary researcher did not know so much.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	900,000	270,000	1,170,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：中世文学、歌人伝、飛鳥井雅親、飛鳥井雅康

1. 研究開始当初の背景

中世社会において和歌の占めた位置の大きさからすれば、中世の歌人の活動は当該期の政治・文化の動向と無関係であり得ず、こ

れを意識しつつ歌人伝を解明することは、和歌史研究の重要な一環をなすものともいえる。

このような観点から、応仁の乱をはさむ時

期に活躍した飛鳥井雅親・雅康兄弟の伝記を研究することには重要な意義が見出せる。公武そして都鄙にわたる彼らの活動は、中世社会における和歌を中核とする古典文化の意義と、その階層のおよび地域的な伝播の様相を明らかにするための、格好の素材になるからである。

雅親は、最後の勅撰集『新続古今和歌集』の撰集に参画し、20代前半で5首の入集を果たした。また、応仁の乱の勃発によって頓挫してまったが、22番目の勅撰集（いわゆる寛正勅撰）の単独撰者にも挙げられた。『新続古今和歌集』の入集者で最も遅く没したのは雅親なので、雅親を最後の勅撰歌人と呼ぶことも可能である。つまり、雅親・雅康は和歌史上においても重要な位置を占めるわけである。

雅親・雅康について言及した研究は少ないが、その事蹟を総体的に捉えたものとなると、井上宗雄著『中世歌壇史の研究（改訂新版）』室町前期・室町後期の両冊が唯一のものといえるだろう。

かかる状況のもとで、和歌事蹟に関心を置きながら、両者の伝記史料を編年集成してその活動の広がりやを明らかにしようとする本研究は、大きな意義を有することになる。

2. 研究の目的

本研究は、和歌を中核とする古典文化が中世社会のなかでどのような意義を有していたのかについて考察するために、室町時代の歌人、飛鳥井雅親（法名栄雅）・雅康（法名宋世、二楽軒と称す）兄弟についての伝記史料を編年集成することで、歌人の活動の広がりやを明らかにするとともに、あわせて、室町時代の和歌史の史料として注目すべきものでありながら、従来文学研究者によって注目されることの少なかった諸史料の紹介＝翻刻・研究を行うことを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 飛鳥井雅親・雅康の伝記史料の収集・整理

飛鳥井雅親・雅康について、史料編纂所架蔵の刊本・複本類をはじめ、東京大学・国立公文書館・宮内庁書陵部・国文学研究資料館さらには京都大学や西尾市岩瀬文庫などの架蔵史料（複製を含む）を主たる調査対象として、史料の収集をはかり、利用しやすいかたちに整理する。さらに、両者の伝記史料を前提に両者の活動を対照することで、各人の活動の特性を明らかにする。

(2) 和歌研究者の注目していない和歌史の史料の紹介（翻刻・研究）

具体的には、東京大学教養学部所蔵『飛鳥井家と歌関係資料』全七軸、宮内庁書陵部所蔵九条家本『甲子革命勘文并仗議定文』紙背九条尚経亭月次和歌会懐紙などの未紹介史料の翻刻・研究をおこなう。

4. 研究成果

(1) 飛鳥井雅親・雅康の伝記史料の収集・整理

① 飛鳥井雅親・雅康に関する伝記史料の集成
収集をすすめたところ、この両名に関する伝記史料の分量はきわめて巨大であり、史料集としてまとめることは困難だと判断せざるを得なかった。そのため、多数の公家日記における所見を索引形式でまとめることを最重点の課題とした。

その結果として、雅親・雅康の両名だけに限らず、室町中後期における飛鳥井家の者について、多数の公家日記における所見を一覧化することができた。これは、総件数 5000 件を超える人名索引として整理し、3 年間の研究成果をまとめた報告書（東京大学史料編纂所研究成果報告 2009-3、以下、単に報告書と呼ぶ）に掲載した。

また、飛鳥井雅親の家集『亜槐集』および『続亜槐集』の詞書についても、編年集成を行い、報告書に掲載した。この作業によって、家集の編纂材料について考察することが可能になった。

(2) 飛鳥井雅康の書状の収集・整理

飛鳥井雅親については『大日本史料』第八編之四十において書状の集成をおこなっているので、雅康について多様な文書群から書状の収集をすすめ、その翻刻を報告書に収めた。

書状を収集するのは、①で集成した日記が伝えるのとは異なる人的な交流を明らかにするうえで、きわめて有効であった。

たとえば、古書肆において万松軒宗山等貴充ての飛鳥井雅康書状を入手したが（本研究の終了後、東京大学史料編纂所に寄贈）、この書状を検討することで、雅康と当該期における政治上の重要人物であった細川政元との交渉の一端を明らかにすることができた。

(3) 東京大学史料編纂所所蔵『飛鳥井雅親消息案』・『飛鳥井雅康消息』に関する基礎的研究

両書について、特にその伝来に関する研究をすすめた。その成果は、『東京大学史料編纂所影印叢書 3 室町時代武家関係文芸集』の解題において公表した。

(4) 東京大学教養学部所蔵『飛鳥井家と歌関係資料』に関する基礎的研究

同書について、所蔵者の許可を得たうえで全文の翻刻・紹介をおこなった。また、伝来を中心に研究をすすめて、解題を付した。

具体的に述べれば、③で取り扱った史料と同じく、かつて飛鳥井家に伝来したものであることを明らかにしている。

以上の研究成果は、今後の飛鳥井家に関する研究の基盤を形成したものといえるだろう。

(2)室町時代和歌関係未紹介史料の翻刻・研究

①東京大学史料編纂所所蔵『蛭川親元詠草』の紹介

同書について全文の翻刻および研究を行った。

同書は、室町幕府の政所代蛭川親元が、主君伊勢貞親の失脚にともなって近江坂本に隠退していた時期（収載年代は文明4年〔1472〕・同5年）における日次詠草の自筆原本で、武家歌人として著名な同人の歌什としては最もまとまったものだといえる。にもかかわらず、従来、まったく利用されていなかった。

さらに、裏面が南北朝時代の禅僧月庵宗光の仮名法語の料紙として再利用されたため、二度にわたる改装を経て、その装訂は複雑な様相を呈しており、詳細な検討を必要としていた。

そこで、全文翻刻および初句索引を作成して『室町時代研究』2号において公刊するとともに、書誌および成立の問題についての研究を『東京大学史料編纂所影印叢書3室町時代武家関係文芸集』の解題において公表した。

また、『蛭川親元詠草』の翻刻については、再度校訂をおこなったうえで、『新編私家集大成（CD-ROM版）』（エムワイ企画、2008年）にも収録した。

②三条西家旧蔵本紙背文書の研究

主として三条西実隆および公条によって筆録あるいは書写された三条西家の旧蔵史料について紙背文書の検討を行った。

特に明治大学中央図書館所蔵『除秘抄』（三条西公条書写）の紙背文書には能登守護畠山義総をはじめ、若狭守護武田氏・越前朝倉氏の関係者、大和の国人十市遠忠など地方の武士による文芸享受に関する史料が多く、歌書に関する言及も少なくない。

そこで、この史料を主たる素材に、石川県立図書館における講座「『加能史料』はいま」において「戦国時代の貴族と加賀・能登」と題する講演を行った。また、その内容をもとに論文をまとめ、『加能史料研究』22号において公表した。

そのなかでは、畠山義総書状の形態と伝来

における特色を関連づけて論じ、従来義総と三条西家との関係は、実隆との関係ばかりが注目されていたが、公条との関係も非常に重要であることを明らかにした。

また、副産物として、『中華若木詩抄』の編者と目される如月寿印（月舟寿桂の法嗣）の伝記について、細川高国の子息で、高国の敗死後に能登に政治亡命を遂げていたという新事実を明らかにすることもできた。

③その他未紹介史料の翻刻・研究

文明6年（1474）の賀茂社における蹴鞠の記録である宮内庁書陵部所蔵『鞠日記』、およびその紙背文書として残された賀茂社祠官を中心とした人物の一首和歌懐紙、宮内庁書陵部所蔵九条家本『甲子革命勅文并仗議定文』の紙背文書として残された文龜4年（1504）2月の九条尚経亭月次和歌会における三首和歌懐紙や、江戸時代における飛鳥井家所蔵の勅撰集についての手がかりになる京都御所東山御文庫所蔵『飛鳥井烏丸両家蔵本御目録』について、翻刻・研究をおこない、報告書に掲載した。

(3)室町後期の軍記『不問物語』の研究

16世紀前半の畿内における細川氏の分裂抗争を主題とする軍記物語『不問物語』（前田育徳会尊経閣文庫所蔵）について、史料としての信憑性およびその成立について検討を行い、論文にまとめ、『年報三田中世史研究』15号において公表した。

これにより、『不問物語』の史料としての信憑性がきわめて高いことともに、細川高国被官の参加する文芸の場がその成立に大きな役割を果たした可能性を指摘し得た。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計5件）

①末柄 豊、畠山義総と三条西実隆・公条父子—紙背文書から探る—、加能史料研究、査読無、22号、2010年、1—27頁

②末柄 豊、東京大学教養学部所蔵『飛鳥井家和歌関係資料』、東京大学史料編纂所研究紀要、査読無、19号、2009年、80—93頁
（<http://www.hi.u-tokyo.ac.jp/publication/kiyo/19/kiyo0019-suegara.pdf>として公開）

③末柄 豊、『不問物語』をめぐる、年報三田中世史研究、査読無、15号、2008年、1—37頁

④末柄 豊、東京大学史料編纂所所蔵『蛭川

親元詠草』、室町時代研究、査読無、2号、2008年、290-341頁

()

⑤末柄 豊、相阿弥の代付折紙について—『真珠庵文書』から—、東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信、査読無、40号、2008年、2-5頁

研究者番号：

〔学会発表〕(計 1件)

①末柄 豊、『大日本史料』における学芸史料、東京大学史料編纂所前近代日本史情報国際センター公開研究会「歴史知識学の創成—科学史・文化史研究と歴史知識学—」、2007年9月

〔図書〕(計 1件)

①末柄 豊・山家浩樹、東京大学史料編纂所影印叢書 3 室町武家関係文芸集、八木書店、2009年、全 287頁

〔産業財産権〕

○出願状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

末柄 豊 (SUEGARA YUTAKA)
東京大学・史料編纂所・准教授
研究者番号：70251478

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者